

研究室紹介

熊本県農業研究センター果樹研究所 病虫化学研究室

熊本県農業研究センター果樹研究所は、県の中部に位置する宇城市松橋町にあります。宇城地方は「デコポン発祥の地」であり、常緑・落葉果樹の様々な品目が栽培されており、研究環境としても大変恵まれた所といえます。また、当研究所への来場者も年間4,000人程度（新型コロナ以前）あり、生産現場と研究との交流が盛んであるのも特徴の一つです。

当研究所は常緑果樹・落葉果樹・病虫化学の3研究室からなり、病虫化学研究室では4名の研究員、3名の現業職員、4名の会計年度任用職員の計11名が所属しています。新型コロナの影響で分散業務となり、ティータムのみ職員が集まりますが、かえって結束力が増したような気もしています。以下、当研究室での主な研究内容を紹介します。

1 施設カンキツ類の天敵利用

施設栽培‘不知火’やハウスミカンでは、ハダニ類の薬剤感受性低下が問題となっています。冬期や夏期のマシン油乳剤の散布も推奨していますが、スワルスキーカブリダニを利用した防除法の研究にも取り組んでいます。国の研究機関や関連企業と連携しながら、天敵放飼後の定着性向上や天敵類に影響の少ない薬剤による防除体系の確立に取り組んでいます。

2 ナシの退緑斑点症状（モザイク症）に対する防除対策

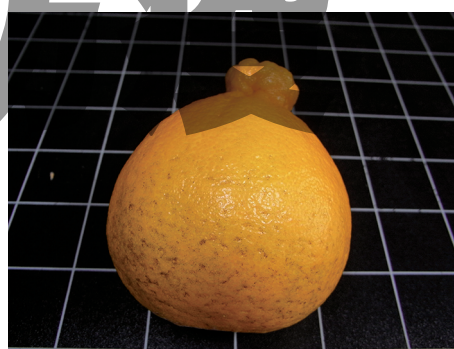
ナシでは、ニセナシサピダニおよびナシ葉退緑斑点随伴ウイルス（PCLSaV）が原因と示唆される葉の退緑斑点症状が10年程前から問題となっており、効率的な防除法の確立を目指して取り組んできました。近年は、越冬期の防除効果や越冬期とシーズン当初の防除を組合せた体系防除の検討を進めています。

3 ‘不知火’汚れ果症に対する防除対策

施設栽培の不知火類において、果頂部側に微小黒点を生じる汚れ果症が問題となっており、原因と思われる菌が複数あると考えられてきましたが、それら候補菌の関与が未整理のままとなっています。そこで、現地多発園での調査により、類似症状の小黒点病との相違点を整理しながら、原因菌の特定や発生生態の解明を進めています。さらに、以前から登録薬剤による軽減策が示されて



ナシ‘あきづき’の退緑斑点症状



‘不知火’の汚れ果症

きましたが、有効薬剤の探索についても、基礎研究と同時並行で進めています。

4 カンキツ病害虫に対するドローン防除の有効性検討

近年、ドローンを活用した高濃度少量散布が、普通作・野菜作の現場で取り込まれている一方で、果樹では、主要病害虫に対する防除効果のばらつきを懸念する意見があり、ドローン防除の有効性検証が急務となっています。そこで、カンキツ類の黒点病やカイガラムシ類等に対するドローン防除による防除効果について検討を進めています。

このように現場ニーズ型の研究課題が多いため、日頃から生産現場と研究が協力して、課題解決に向けた取り組みを進めています。

(研究主幹 杉浦直幸)